

京都 銘品 モノ がたり ⑬

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。



西陣織の保存・普及のために作られた芸艸堂の『綾錦』全11巻の中の1枚。版が重ねられ色づき、完成までに約100回摺られている。毎巻200部発行し、天皇・皇后両陛下に献上されていた。

京版画

京版画とは、舞扇子や絵巻物、調度品、美術品など宮廷文化や伝統芸能と共に発展してきた木版印刷技術。町人文化と共に発展してきた浮世絵を主に摺る江戸版画と区別してこう呼ばれるが、ともに木版印刷である。

木版印刷の起源は飛鳥時代に遡るといわれ、日本に伝わったのは仏教伝来と同時期、6世紀半ば。経文印刷用の文字木版に端を発する。平安時代には経典を手摺する「摺經供養」が流行し、その後、文字だけでなく仏の姿を描く「印仏」「摺仏」が登場。日本の木版印刷は文字から絵画の領域へと広がった。やがて「墨一色摺」だったものから、「多色摺」へと技術が向上。花札やかたるたなどの娯楽用品に加え、「浮世絵木版画（錦絵）」が登場したことで木版の多色印刷が一気に広まったのである。

木版画は、下絵を描く「絵師」、版を彫る「彫師」、版を摺る「摺師」の三者による分業。多色摺は色ご

とに版木が分かれており、和紙に色を摺り重ねて一枚の絵に仕上げていく。版木の数が多いほどに時間も費用もかかるため、大量印刷する場合は無駄を省きシンプルに表現する必要があった。こうした中で生まれたのが、江戸時代に町人の間で人気を博した浮世絵。大衆が安く買えるよう、絵師・彫師・摺師が独特の構図を少ない版で表現した傑作で、洗練された絵柄と色彩美が今なお私たちを魅了している。

彫師・摺師の息を合わせて

浮世絵は今なお京都でも木版印刷で摺られているが、京版画とは仕上がりが異なる。版木に力強く摺り込む、主線（輪郭線）がくっきりとした浮世絵などの江戸版画に対し、日本画家らの原画を忠実に再現していく京版画は、和紙に胡粉や顔料を重ね、色（摺り）数が多く、やわらかに、ふわりと仕上げる。この風合いは、彫師と摺師の息が合っていないとう



和紙を置くところを「見当」といい、毎々合わせることが難しい。「見当違い」という言葉は木版画から生まれた。



同じ版を使って違う色を摺り重ねていくこともある。バレンの力加減も長年で培われたもの。



絵の具は顔料を使用。顔料を版に運ぶのは竹の皮でできた溶き棒。木版画に使われる道具は、職人自ら作っている。



顔料をアラビア糊でのばし、馬毛のブラシで版に色を入れていく。



黄色から緑にかけてグラデーションが美しい浮世絵。ぼかしの技術は木版画の仕上がりを大きく左右する。



まく表現されない。原画を見て、版をいくつに分けて彫るのか、またそこに何色で摺るのか——技と技の結晶が、一枚の京版画を生み出している。

手で摺る木版印刷は、版が変わる度に「見当」にあわせて寸分狂わず同じ位置に和紙を置く。版がずれてはいけな^{けんとう}いし、さらに同じ濃さで摺り続けなければならない。タンポで水をひき、顔料と水の境目をつくって絶妙な濃淡を表現する「ぼかし」も同様。「ぼかし」加減は最も難しい技のひとつで、熟練の摺師にしか成し得ない。

伝統工芸の繁栄のために

戦後、摺師は随分減り、高齢化も進んでいる。そんな中、個人ではなく工房形態で木版画を支えているのが佐藤木版画工房だ。20年近く修業を積んだ若手職人に与えられる“京もの認定工芸士”を含む、4人の摺師が京版画や浮世絵を摺っている。「見当

に紙がきちんと合うようになるまで10年、そこからが本当の勉強です」と語る2代目摺師の佐藤景三さん。日本唯一の手摺木版和装本の出版社である芸^{うん}^{そうどう}艸堂をはじめ、全国から木版印刷の注文を受けている。

ひとつの絵を200枚摺っていた往時と違い、今では50枚程度を摺ることもあるという木版画。工房形態を守り、京版画の技をしかと継承している佐藤さんのような存在は、伝統工芸士の中では珍しいかもしれない。それ以上に、印刷機による印刷が主流の今も、寺社や芸艸堂など木版印刷という伝統を大切に^{うん}する人々あってこそ、京版画、江戸版画は続いているといえる。いま、京都ブームも後押しし、京版画のやさしい風合いとモダンな絵柄が見直されている。伝統工芸の繁栄を支える一助として、新春らしい京版画を購入するのもいいだろう。

(取材協力：芸艸堂) <http://www.hanga.co.jp/>